

2. 地域の熱中症リスク評価

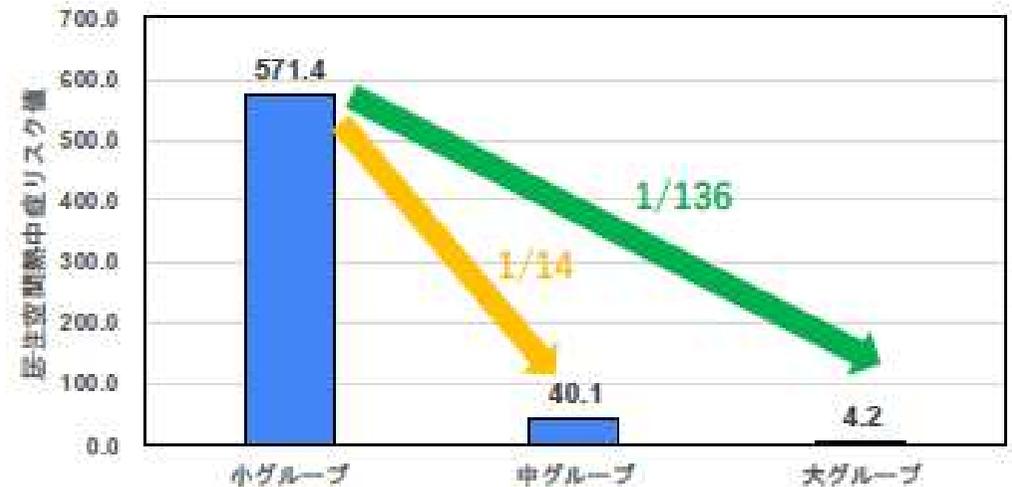
事例2. 神奈川県川崎市

- 市内7区に分散させて高齢者の協力者を選定、7月末から9月上旬にかけて自宅で長時間滞在する場所に**小型気象センサー**を設置し、データは無線通信により逐次回収した。
- 20世帯分の1か月に及ぶ気温・湿度等の測定データと、市の大気・気象観測地点における同期間の気温等のデータをグラフにプロットし、エアコンの使用実態等を検証した。



調査期間総時間数：33日間×24時間＝792時間

▲エアコン使用判定時間数(昇順)



▲平均室温30℃台以上の時間数のグラフ

最もエアコンの使用時間が少ない「小グループ」のリスクが著しく高い。居住空間の熱中症リスクに大きな影響を与える要素として、①エアコンの使用頻度、②窓・扉の開閉等の換気頻度、③建物構造(戸建て、集合住宅)があることがわかった。

■ 苦労した点

データ解析に当たり、約600日(20世帯分の1か月)分の室温データと外気温データを比較し、外気温に対して室温が連動していないデータを目視で調べ、エアコンの使用判定を行ったことに苦労した。

■ 工夫した点

エアコンの使用判定を行うことで、20世帯分のデータを対象に、エアコンの使用時間に応じたおおまかなグループ分けを行い、そのグループごとにおける室内での暑熱環境について解析を行うことができた。